

Images between concrete and abstract

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小谷, 忠典 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/604

「具体」と「抽象」の巡り

小谷 忠典

昨年の夏、土屋忍先生に私用があり、はじめて武蔵野大学を訪れた。土屋先生と面会したのは文学部の演習室で、そこには所狭しと本が積み上げられていた。

私は子どもの頃から片仮名が苦手で、軽い学習障害だとは思いますが、中学生になるまで読み書きができなかった。今でも「カタカナ」特有の形状がどうしても捉え難く、理解するのに時間を要する。それ以来、言葉に苦手意識を持っている。

私用が済み、書物の圧迫感から逃れるように身支度をしている、土屋先生が、「近くゼミで、取材に出掛けますが、それを映像で記録してくれませんか?」と言った。手渡された企画書に目を通すと、「西東京と文学」がテーマであることが記されていた。

私は一瞬戸惑ったが、その場で引き受けることにした。課外活動を追うだけの手軽な作業だということも承諾した理由のひとつだが、何より「西東京と文学」というモチーフが、華やいだ中心部から少し離れた場所、何やら独自の輝きを放っているように感じられたからだ。

秋になると、西東京にゆかりのある作家、または作品を映像取材するというスタイルで、5つの班に分かれた学生たちと撮影準備を行なう。その中で私が感じたのは、言葉と映像の表現手段の違いだった。言葉は現実と関わる必要はないが、映像は現実と関わらなければ成立しないという単純な違いだ。

学生たちは取材に出る前に、その対象となる人物や地域に関する資料を読み込んでいて、例えば「機銃掃射の痕が残る貯水タンク」と言葉では捉えている。

しかし映像は、実際の「機銃掃射の痕が残る貯水タンク」を撮らなければ、何の表現にもならないのだ。

「抽象」としての言葉に対し、映像では、直接的な「具体」が必要となる。(そう言えば、祖母が死んだ時、寺の住職が戒名を書いているのを見て、幼心に「人は死ぬと、言葉になるのか……」と思ったことがある)。

実際、「具体」を掴む作業に不慣れた学生たちは、困惑した様子だった。何をどう撮れば良いのか、分からないのだ。逆の立場で考えようと、突然、「小説や評論を書きなさい」と言われているようなものだろう。

そのような状況の中で、ふと思いついたのが、プロジェクトが開始される前、土屋先生に頂いて読んだ『武蔵野文学を学ぶ人のために／土屋忍「編」』に綴られていた、土地に根づいた文章だった。武蔵野の土地を練り歩いて過ごした研究者や作家たちの身体感覚が、力強い

説得力となり、言葉に染み込んでいたのだ。その時から、「外に出る」という土屋ゼミの基本テーマや、土屋先生が課外活動に「具体」を必要とする映像を取り入れた意図が、垣間見えた気がした。

文学部である学生たちが現実と関わることにより、「具体」を孕んだ言葉を得られるよう、私は少しでも彼らの力になればと思った。撮影中、ドキュメンタリー表現の基本的な手法であるインタビューや演出技術を使い、「具体」をどう捉えるのか、またはどう受け入れるのかということを生徒たちに伝えた。

映像がどこまで彼らの言葉の糧になったのかは、現場を離れてしまった私には分からない。しかし学生たちは、現実を題材としながら世界を見つめる外的な行為と、自分を見つめる内的な行為が同時進行で進んでいくドキュメンタリーの魅力に触れながら、伸びやかに身を以て「西東京と文学」の関係性に立ち入ったのは明らかだ。

私自身の体験を記すと、特に印象的だったのが、一昨

年亡くなられた文芸評論家、秋山駿さんについての取材を行なっている時に出逢った「法」「痛」という言葉だ。

ドキュメンタリー撮影の最終日、私たちはひばりが丘にある自宅のマンションを訪れた。この日、秋山さんの蔵書が大学の文学館に寄贈されることになっていた。配達業者が到着すると、段ボールに箱詰めされた夥しい数の本が運び出された。その様子を秋山さんの妻であり、装幀家の秋山法子さんが見守っていた。

書物は寄贈されることで、新たな読み手を得て再生をくり返すだろう。しかし、「さっぱりして、良いわね」と語る言葉とは裏腹に、法子さんの華奢な背中は、最愛の人との2度目の別れを告げているように感じられた。

撤出作業が落ち着いた頃、カメラを持った私に法子さんがそっと近寄ってきた。そして、秋山さんが遺したメモ帳について話しはじめた。そのメモ帳も出版社に寄贈することになっていたので、編集者に渡したところ、法子さんについての記述があると再び戻ってきたそうだ。プライベートなものだけに、これまで一度も開いたことのなかったメモ帳を躊躇いながら覗いてみると、そこに

は赤ペンで丸く囲まれた「法」「痛」という文字がびっしりと書かれていたのだと説明してくれた。

法子さんは長年、帯状疱疹を患っていて激しい痛みに襲われることがしばしばあり、それを秋山さんは「法」「痛」という記号で表していたのだ。

痛みは共感できない。秋山さんは書くことで、法子さんの痛みを引き受けようとしたのではないだろうか。そう思うと目頭が熱くなるのを感じた。

しかし、「具体」を表現するための道具であるカメラを持つている以上、冷静を保たなければならぬ。その時、何かを啜り上げるような音が聞こえてきた。音の方向に目をやると、録音の柴田隆之がマイクを握り締めながら落涙していた。

音の管理者が、啜り声をあげていることに啞然としたが、同時にこのプロジェクトに彼を誘って良かったとも思えた。彼の共感力があったからこそ、法子さんは私たちに大切な秘密を打ち明けてくれたのだから。

続いて法子さんは、「どこに、しまったかしら」と、棚の中からメモ帳を探し出し、そのページを見せてくれ

た。それを見た私は不思議な体験をした。眼光紙背という熟語があるが、まさに記号としての「法」「痛」という文字の背後から、井戸水のように内なる言葉が湧き上がってきたのだ。

言葉に苦手意識を持っていた私は、秋山夫妻の痛みを通過することで、はじめて言葉の美しさに触れた。そして、この印象深い体験は、その後の製作に色濃く反映される。

ドキュメンタリー撮影後、「法」「痛」の文字が種となり、私の内側で葉や枝を伸ばしはじめた。現実を捉える中で、湧き上がる想像もひとつの現実として作品に反映させる傾向にある私は、既に撮られたドキュメンタリーパートにフィクションパートを新たに撮り足し、それらを融合させるという構想を立てた。

そこで、脚本家の合田典彦に脚本製作を依頼した。合田はこれまでの経緯を汲み取った上で（既に、ドキュメンタリーパートの構成を担当してくれていた）、「法」子の「痛」みの物語を書き上げてくれた。

脚本に合ったロケ地を探すため、冬の西東京の簡素な住宅街や農用地を徘徊する中で感じたのは、殺風景の力だった。風景とは、向き合えば心象的な存在で、それが殺風景であればあるほど自分自身に迫って来るものである。誰も振り向かないような整備不良の路地や更地が鏡となり、曖昧な記憶を映し出す。そう思うと、この地で数々の文学が生まれたことには頷ける気がする。

私は、法子という登場人物が自分の言葉を綴るまでは、「西東京と文学」をテーマにしたこのプロジェクトは終われないと考えた。

しかし問題は、当初の「課外活動を追うだけの手軽な作業」から、自分でもコントロールできないまでに膨れ上がってしまった構想を、どう土屋先生に説明し理解を得るかだ。

意を決して、土屋先生に、「フィクションパートも撮り足したい」と頼み込む。するとあっさり、「私もそう思います」のひと言で快諾してくれた。私は製作中、土屋先生の柔軟性と実行力、そして文学を慈しむ態度に何度も救われた。

ゼミ生の漆川由希子が、主演の法子役を引き受けてくれた。漆川を選んだ理由は、大学の写真部である彼女が普段からレンズを通して「具体」を見つめていたからだ。能の喜多流仕舞教士、エマート・リチャード先生が扮する不思議な老女との関わりの中で、法子は痛みの記憶と向き合い、終盤には「抽象」である言葉をノートに綴る。ノートを閉じた法子は、顔を上げ、再び窓の外に広がる「具体」に視線を送る。

春、遂には映画となった『ウエスト・トウキョウ・ストーリー』の製作で、私が胸の内に留めたことは、「具体」と「抽象」の巡りによる確かな表現である。

(こたに ただすけ 映画監督)

*小谷忠典氏は、二〇一五年四月より、本学教員準教授を務めている。



2014年12月27日 試写後のトークイベント（雪頂講堂）